

# 英国におけるフットボールの歴史に関する研究(12)

## —フットボールの普及について—

秦 修 司

### A Study on History of Football in Britain (XII)

#### —The Popularization of Football—

Shuji HATA

#### 緒言

英国中の数多くのパブリックスクールの卒業生がフットボールを行ったり、フットボールについて論議したり、そして厳格なアマチュアの方法でフットボールの成文化を試みている一方で産業主義が地域社会に確実に足跡を残していた。そして又、特に中部イングランドや北部イングランドにおいて50年でイングランドの性格全体を変えることになった都市化の過程が進んでいた。すでに1861年までに国勢調査報告では都市の人口が優勢な特徴をとっていた。居住人が2万人以上の町が72あった。その後人口の大多数は何世紀もの間英国人の遺産であった自然の田舎の気晴しや娯楽から切り離され、都市で生活する運命となった。ここでは、フットボールアソシエーションが設立され、その後どのようにフットボールが普及され発展していったかについて考える。

#### 本論

土曜日が半ドンとして制度化されたことによって、工業労働者は新しく週末の休暇を得たがそれは1850年の婦人や年少者が土曜日の午後に労働するのを禁止する工場法の結果生じた。それ以前の唯一の休日は日曜日は別にしてクリスマスデー、イースターマンデー、ホイットマンデー、そして地方の市の日や他の祝祭日であった。工場法によって婦人や年少者に認められたことが成人男性にも徐々に適用されるようになった。それは最初、バーミンガムのエンジニア

リングの会社によって認められたと言われている。そのようにして土曜日の午後の娯楽を楽しむに待つ極めて多くの人々が10年位で存在するようになった。近代における都会の文明化の特徴である様々な形式の大衆の娯楽を発達させるためにフィールドが解放された。

それら大衆の娯楽の最初のものの1つはフットボールであった。しかしフットボールが他の人々の見る娯楽になるにはフットボールを行うプレーヤーの存在が必要であるが、その過程の最初の段階は——それは極めて健全であるが——イングランドのすべての町や村におけるフットボールの急激な発達であった<sup>1)</sup>。フットボールの競技規則について多くの不確かさや見解の相違が見られたフットボールアソシエーション設立の3年後の1866—1867年のシーズンにはその構成となるクラブはバーンズ、シビルサービス、クリスタルパレス、ケンシングトンスクール、ロンドンスコティッシュ、ノーネームズキルバーン、ロイヤルエンジニア、シェフィールド、ワンダラーズ、ウォーラビィハウスの10のクラブだけであった。しかし、フットボールアソシエーションの安定化が進むと急速に会員が増大した。F.A.カップ(The F.A. Challenge Cup Competition) が開始された1871年までにフットボールアソシエーションに50のクラブが加盟したが、これらのうちクイーンズパーク オブグラスゴー、ダニングトングラマースクール、ヒッチン、ロイヤルエンジニアーズ、レイゲイトプライオリー、メイデンヘッド、グレートマ

ーロー、ワンダラーズ、ハーローチェッカーズ、バーンズ、シビルサービス、クリスタルパレス、アップトンパーク、クラブハムローバーズ、ハンプステッドヒーテنزの15のクラブがF.A.カップに参加した。一方、1905年までにフットボールアソシエーションに10,000程のクラブが加盟しており、その272のクラブがF.A.カップに参加した。

初期のフットボールのクラブはそのほとんどがパブリックスクールの卒業生もしくは中産階級のメンバーによって設立された。1863年にフットボールアソシエーションが設立された時、そのメンバーは優勢的にこのタイプであった。しかし、その後の20年で著しい変化が生じた。技術工、工場労働者、そして急増した何千人もの工業の町に従事している店員から成る新しいフットボール人が存在し、1870年代そして1880年代に新たに設立されたクラブのほとんどはこの中からであった。

1870年以後設立されたクラブでのほとんどは中産階級出身ではなかった。レスターシティ(1884年設立)は何名かの Old Wyggestonians によって設立されたが、彼等はボールとゴールポストをそれぞれ1シリングと6ペンスで購入した。グリムスビータウン(1878年設立)はメンバーのほとんどが知的職業人であるが小売商を含めた熱狂者たち数名のグループによって設立された。ブラックバーンローバーズ(1874年設立)はブラックバーングラマースクールの卒業生2名によって設立された。しかしメンバーの多数はパブリックスクールもしくはグラマースクールにさえ在学したことがなかった。多くのクラブはフットボールを心から愛する熱狂者の小さなグループによって設立された。このような方法で設立された他のクラブにバーミンガム(1875年設立)があるがその競技グラウンドがバーミンガムのグラウンドの近くにあった荒廃地の一部であった。ミドルスブロー(1876年設立)はちょっとした夕食会において発足した。ストックポートカウンティ(1883年設立)はカフェ

において開催された会議で発足した。ロザーハムユナイティッド(1884年設立)はその発足が街燈の下において行われたと言われている。ミルウォールが1885年にそしてスウォンジータウンが1900年に設立された。

数多くのクラブはそのメンバーを大企業の従業員から得た。マンチェスターシティ(1885年設立)はアイルランドのクラブであるダンダーク(1915年設立)が大アイルランド北部鉄道の労働者によって設立されたようにそのメンバーがランカシャーとヨークシャーの鉄道の従業員に限定された。アーセナル(1886年設立)はその名が示すようにウールウィッチアーセナルで働いていた北部イングランドと中部イングランド出身の若者であった。コベントリーシティ(1883年設立)は本来自転車製造会社であるシンガーズ(Singers)の従業員のためのクラブであった。ウェストハムユナイティッド(1900年設立)はテムズ鉄鋼会社と関係があった。クリスタルパレスはクリスタルパレスの職員のために準備された。アイルランドのクラブの中でもデイスティラリー(1899年設立)はアーセナルのようにその名がその起源を表わしている。ドルフィン(1921年設立)は精肉業者社会組合によって設立された。

ビクトリア王朝時代において、クラブ設立の動機がゲームを愛するというよりは別の、つまり仲間を向上させるという願望であったが、それは事実その時代に特徴的な動機であった。有名なクラブの多くはその初期に教会もしくは礼拝堂と関係があった。会衆である若者にフットボールの効用を導入し、そのようにしてパブリックスクールの少年が気を紛わしたように、あまり価値のない気晴らしから転換させるのを切望した若い教師又は聖職者によって設立された。これはそのクラブがセントピーターズの副牧師であるプリーディ牧師(Rev. T. T. Preedy)によって設立されたバーンズレー、そしてその設立者がピット牧師(Rev. W. Pitt)であったスウィンドン(1881年設立)のケースであったと言

われている。1885年に設立されたクィーンズパークレンジャーズも又その起源を教区牧師であるゴードン ヤング牧師 (Rev. Gordon Young) まで遡るが彼がドループストリートボードスクール出身の少年のチームをまとめた。ウルバーハンプトンワンダラス (1878年設立) はセントルークスチャーチスクール、ブラッケンホルトと関連して設立された。ポールトンワンダラス (1874年設立) は本来、クライストチャーチフットボールクラブとして知られた。サウザンプトン (1885年設立) はサウザンプトン市の筆頭の教会であるヤングメンズアソシエーションによって設立された。アストンビラ (1874年設立) はアストンのウエスレーセン礼拝堂において非国教徒によって設立された。最初はラグビーのコードを支持したバーンレー (1883年設立) は地方の Y.M.C.A. の後援のもとに設立された。教師自身そしてその仲間もしくは生徒のために教師たちによってある時期に何千ものフットボールのクラブが設立された。これらのうちいくつかのクラブは評判を得たが、その中にサンダーランド (1880年設立)、ノーサンプトンタウン (1897年設立)、そしてボーツマス (1898年設立) があった。本来、ウエストブロムウィッチストローラーズとして知られたウエストブロムウィッチアルビオン (1879年設立) はクリケットクラブと関係する労働階級の少年たちのために設立されたが、そのクラブは入会金が6ペンスであり、週1ペンスの会費であった。純粋な慈善でクラブが設立されたのは希有であったが、そのようなものにグラスゴウの貧しい人々を救済する資金調達を目的を持ってアイルランド人によって設立されたスコットランドのセルティック (1888年設立) があった。

有名はフットボールのクラブの数多くは本来フットボール以外の他の目的をもって設立され徐々にフットボールに集中するようになっていたことを記す価値があるが、最も古いクラブの1つであるノッチングムフォレスト (1865年設立) は最初はホッケーの形態であるバンディを

行っていた。ブンドレー (1883年設立) はラグビーを行っていた。しかし、ほとんどのクラブはクリケットのクラブであったが、メンバーをまとめておくためにウインタースポーツを導入したが、それらのクラブにシェフィールドウエンズデー (1870年設立)、クリューエアレキサンダー (1877年設立)、プレストンノースエンド (1888年設立) そしてトッテンハムホットスパー (1882年設立) があった。トッテンハムホットスパーは、後に F.A カップで1901年、1921年と二度優勝したが最初はクリケットのクラブとして設立された。ダービーカウンティ (1884年設立) はダービーシャーカウンティクリケットクラブの分派として設立された。

フットボール界において徐々になされる社会的特性の変化は又、F.A カップの歴史から例証されるかもしれない。F.A カップが1871年に最初に制定された時、出場したクラブは身分ではアマチュア、そして性格では主として中産階級であった。最初、彼等はそのほとんどがオックスフォードとケンブリッジの2つの大学とともにロンドン地区の出身であり、クィーンズパーク オブ グラスゴウのクラブだけが北部イングランド出身であった。2、3年後、シュロップシャーワンダラーズのようにシェフィールドや中部イングランドの2、3のクラブが姿を現わした。このように南部イングランドが F.A カップに出場するクラブが多かった理由は南部イングランドにより多くのクラブが存在したというよりはむしろクラブが試合を行うためにロンドンまで長距離の旅をするのは時間を要し費用がかさむということにあった。クィーンズパークは F.A カップの最初の年の1872年、ワンダラーズと引き分け、ただ単に金銭的余裕が無かったためにワンダラーズとの再試を断念しなければならなかった。

F.A カップの初期において最も成功を収めたチームはロイヤルエンジニアーズとオックスフォード大学であったが、ロイヤルエンジニアーズは1875年に、オックスフォード大学は1874年

に優勝し、1872年から1878年にかけて各々三度決勝に出場した。しかし、F.A カップは現実的には特定の学校や最初の7年で1872年、1873年、1876年、1877年そして1878年と5度優勝し、1876年と1877年と2年連続優勝したために1878年には無条件で優勝を与えられたワンダラーズとして知られた地域性とは全く関係のないパブリックスクールの卒業生のチームによって支配された。1875年頃から数多くのパブリックスクールの卒業生のクラブの設立の状況において新しい要素、しかしまだゲームの社会的性格を変えるまでには至らなかった要素が感じられるようになった。まさに2、3年でこれらのチームは次々にF.A カップで主要な位置を占めるようになり、最終的には彼等の最高のメンバーを奪われやがてF.A カップの舞台から姿を消したワンダラーズを凌駕した。パブリックスクールの卒業生のクラブの中でも1875年、1876年、1881年、1882年そして1883年と4度決勝に出場し、実際に1882年に1度優勝したオールドイートニアンズと1881年に優勝したオールドカシュージアンズが卓越していた。この時のイングランドのインターナショナルのチームはドリブリングのコードを支持した2、3のパブリックスクールの卒業生で完全に構成された。当時、ジェントルマンでない者がアソシエーション又はラグビーのフットボールにおいてイングランドの代表選手になるのは考えられなかった。この時代の最も称賛されるべき選手の典型はワンダラーズそしてオールドイートンマンズクラブの、後にキナード卿(Lord Kinnaid)となったキナード(A.F.Kinnaid)であったが、彼は赤いあごひげをして長い白のズボンを着用し青と白のクリケット帽を被り9度決勝に出場し5度が優勝チームにあり、1882年、オールドイートニアンズが決勝でブラックバーンローバーズを破ったあとオーバーのバビリオンの前で勝利を祝って逆立ちをした。しかしすでに新しくてパワフルな力が動いていたが、それはアソシエーションフットボールにおいて他のすべてのことのように

F.A カップの性格全体を変える定めにあった。工業の中部イングランドや北部イングランドの労働階級のクラブはその数が増大し力を集めており、やがてそのいくつかのクラブはこれまで問題視されることのなかった南部イングランドのジェントルマンのクラブの支配に挑戦が可能だと考えた。バーミンガムでの出来事の経過が古い秩序が何と急速にそして劇的に変化していたかを極めて明瞭に例証している。というのは1874年バーミンガムでは1つのクラブがアソシエーションフットボールを行わなかったが2年以内に1876年にアソシエーションフットボールを行うクラブの数が20かそれ以上に増え、地方の協会が設立されバーミンガムの代表チームを編成する計画が着手されたからである。1年後の1877年バーミンガム協会は実際にロンドンに挑戦したがその試合はオーバーで行われ、ロンドンが11ゴール対0で勝利した。しかしバーミンガムのプレーヤーは決して落胆することなく2年後の1879年再びロンドンのチームとオーバーで対戦し、ロンドンのチームを2ゴール対0で破った。1878年までにアソシエーションに極めて多くの地方のクラブが加盟したので1879年カップ・タイの新しい競技システムが導入された。クラブを地区に分け予選を行った。1878年、ランカシャーのダーウェンという無名のクラブがカップ・タイにおいてオールドイートニアンズと2度対戦し2度とも引き分けたがそれはそのシーズンの大評判であった。これまで誰も地方の工業労働者のクラブであるダーウェンについて耳にしたことがなかったが3回戦において彼等が南部イングランドに来てレムナンツとして知られたパブリックスクールのチームを破り、4回戦のオールドイートニアンズとの対戦は極めて劇的になった。オールドイートニアンズが容易に勝利すると看做され彼等は最高の自信を持ってゲームを開始したがそれはダーウェンに得点されることなく5ゴール得点した時正当化されたようであった。しかしねばり強いダーウェンのプレーヤーは遅れを克服し縦続けに5ゴ

ールを得点し引き分けで終わったが、ゴールの4つは残り15分で得点された。疲労したオールドイートニアンズは延長戦を行うのを拒んだ。そしてその1ヶ月後ダーウエンは再び南部イングランドに来て、オールドイートニアンズと対戦し再び引き分けた。第3回目の対戦になってオールドイートニアンズがダーウエンに勝つことができた。

南部イングランドの水準は高く維持され1882年になってはじめて北部イングランドのブラックバーンローバーズが決勝まで進んだ。その年、ブラックバーンローバーズはオールドイートニアンズに1ゴール対0で敗れた。それは古い体制であるオールドイートニアンズが勝利したがこれが最後となった。翌1883年、オールドイートニアンズは再び決勝に進んだが延長時間のあとブラックバーンオリムピックに2ゴール対0で敗れ、そしてオールドイートニアンズはやがてF.Aカップから姿を消した。この場合の勝利チームであるブラックバーンオリムピックチームのプレーヤーの職業に注目するのは興味深いことである。——職工(3名)、紡績工、紡績職工、製鉄工、額縁製作者、鉛管工の親方、歯医者助手、プロフェッショナルを装った者(2名)。そのようなチームが長い間ジェントルマンの領分であった余暇に入っていく、彼等独自のゲームでジェントルマンを打破することが可能となり、時代が変わったのは確かであった。

これはその全盛期を終えたパブリックスクールの卒業生のチームの運命を決定した。彼等はやがてF.Aカップに参加しなくなったが、一方、北部イングランドの新しいクラブがとって代ったがその中でもその主たるものはブラックバーンローバーズであったが、それはワンダラーズが10年前になしたように急に1884年、1885年そして1886年と3度縦続けにF.Aカップで優勝した。そうする際にブラックバーンローバーズは労働階級の時代ばかりでなく北部イングランドが優位に立つ時代を画した。というのはトッテンハムホットスパーが1961年に再びF.A

カップで優勝するまで優勝杯は18年の間、北部イングランドに残ったままであった。このあと中産階級そしてジェントルマンのプレーヤーが一流のアソシエーションフットボールに登場する機会が少なくなっていった。

パブリックスクールの卒業生のチームが優位に立っている間、観客はほとんどなく、F.Aカップの最初の8年は決勝においてさえ観客数が5,000名を上回ることにはなかった。しかし、プレーヤーの社会的素性が変化し、ゲームの中心が北部イングランドに移るにつれゲームを行うよりはゲームを観戦する人たちの数が急激に増加し始めた。オールドイートニアンズとオールドカシュージアンズが決勝に残った1881年の観客数は4,000名であった。4年後の1885年、ブラックバーンローバーズとクィーンズパークの最初の北部イングランド同士の決勝戦では観客数が12,000名に増加した。それに応じてあまり重要でない試合の観客数も増大した。やがてサッカーを観戦することが国民の主要な娯楽となった。すべてのチームにはローマ又はビザンチンの群衆のように彼等流儀のカラーを誇示する熱狂的なサポーターの群衆が存在し、時の経過にともない群衆は何千、何万人にも膨れ上がった。その事実は、都市の人々にとって土曜日の午後他に何に行くことがほとんどなかったということであった。彼等がフットボールを行うことができたにせよすべての人がみずからフットボールを行う訳ではなかった。そのためにゲームをどのように行うか以外にゲームについてあらゆる知識を有する観衆の世代の発達があった。こういったスポーツを観戦する問題が相当の割合に達した。しかし1880年代のフットボールの群衆は極めて大きくなり過ぎて当局の問題になっていった。27,000名の人々が1888年のアストンビラとプレストンノースエンドの引き分け後の再試合を観戦した。45,000名の人々が1893年のウルバーハンプトンワンダラーズとエバートンとの決勝を観戦した。優勝杯が19年の間で初めて南部イングランドに持って行かれた1901年のト

ッテンハムホットスパーとシェフィールドユナイティッドとの決勝では110,000名の観客数で最高頂に達した。

サポーターの群衆がアウエイマッチでチームに同行するのはすでに通常のこととなっていたが、新しく導入された鉄道で遠征するシステムがこれを可能にした。サポーターの群衆が実際の試合で呈した問題とは別に試合前後に彼等が町に入るのはフットボールに関心のない人々によって必ずしも歓迎されなかった。ブラックバーンローバーズの何千ものサポーターが1884年のブラックバーンローバーズとクィーンズパーク オブ グラスゴウの最初の北部イングランド同士の決勝のためにロンドンに旅行した時、彼等は乱暴で略奪的行為をなし奇妙な誓いをなす北部イングランドの群衆とボールモールギャゼット紙に軽蔑的に言及された。乱暴で略奪的行為というのは真実であった。というのはサポーターがチームカラーの帽子、スカーフ、傘を持参したばかりでなく、注目を引き彼等の存在をアピールするために異様で風変りな服装をしたり、さらに楽器、ベル、そしてガラガラ鳴る器具を備えてアウエイマッチを観戦するといった熱狂が始まっていたからである。これらの侵入を受けた町の平和な人々はいよいよながらそれに耐えた。フットボールビジターの行為は必ずしも害がないというばかりでなく小さな町では、特に試合のあとそれは深刻な治安妨害になり得た。シュリューズベリーのような工業化されてない町においてでさえフットボールの群衆の行為についての1899年の記事はその当時極めて一般的であったに違いないことが垣間見られる。

イースターマンデーに何千人もの人々がシュリューズベリーに居合せ、賭け、飲酒、汚い言葉など考えるだけで恐ろしく、一方ハイウェイでの怒号、馬鹿騒ぎは家へ帰りつつある平和な住民に恐怖であった<sup>2)</sup>。

試合のあとの泥酔やなぐりあい他は他の批評家によって述べられている。初期における地方の党

派心の興味深い副産物はフューネラル カードであり、敗者のあざけりの記念であり、勝利チームのサポーターの間で売買された。History of the F.A. Cup から引用された次の例は1893年のものでありウルバーハンプトンワンダラーズが決勝でエバートンに勝利したことを祝って販売された。

エバートン フットボール チームを偶んで

汝らはウルブズの激しい攻撃のためカップコンペティションに敗れた。

しかるに汝らの望みは、同日フットボール墓地に埋葬された。

彼等はあらゆる栄光を背負って来た、

その有名なトフィー タウンから、

有名な‘ウルブズ’と戦うために、

イングランドの有名なチームの

トフィーが大胆にやって来た、

彼等の勝利を求めて、

しかし、今や沈んで家に戻る

問題に悲嘆にくれて、

さよなら、さよなら親愛なるオールドエバートン、汝はつばをドリブルにする位である；

汝は困難なプレーで今日それを失くした  
そして我等はいつまでも大声で叫ぼう<sup>3)</sup>。

フットボールのクラブが最初に試合の入場料を徴収するようになったのは多分に1870年ぐらいである。観客のアプローチをコントロールすることができなかった共有地もしくは公園でしばしばゲームが行われた初期の時代には入場料の徴収は可能でなかった。しかし、費用を充分におぎなったり観客から料金を徴収することによって収益をあげることはおのずと考えられ入場料の徴収が規則となった。ゲームの人気の増大にともない主要なクラブの週の入場料収入は増大した。アストンビラが1874年に入場料を徴収した時、その当日の収入は5シリング3ペニーに達した。1882年にニューキャッスルユナイ

ティッドだけで、最初の試合で7シリング11ペニーを得た。19世紀最後の25年で生じた驚くべき変化はこれらの数値とアストンビラの1904年、1試合で得た総額14,329ポンド14シリング2ペニーとを比較する時に判断されるかもしれない。

アソシエーションフットボールは事実金儲けの商売になってしまったので、それはスポーツと言うよりは産業と言うことができた。主要なクラブの多くは事実、株式会社法のもと法人化するようになり、その2、3のクラブは他の商業団体のように実を結んだ。フットボールアソシエーション自体は1903年に法人化し資本金が100ポンドで2,000株を有し、1株1シリングであったが、決して実を結ぶことはなかった。各々のクラブは経済的関心事として収益の増大を確実にするための手段を講じなければならなかった。その状況の新しい要素は最初1880年ごろいくらか明らかになった。フットボールのクラブは財政的に継続させるためにそのサポーターを引き留めておく必要があったが、その目的は高い水準のパフォーマンス、できれば高い水準の成功を確保するように考えられ得る最高のチームを毎週出場させることが必要不可欠であった。しかし、中部イングランドや北部イングランドにおけるプレーヤーの大多数は労働階級の人々であったのでこれは困難であった。多くのクラブはアウェイマッチの費用を出す余裕がなかった。そればかりでなく競技するために仕事もしくは時間を免除する必要があったならば賃金を犠牲にする余裕はなかった。その解決策はその費用を支払って賃金の不足を補うことであった。これは事実、公然とは認められなかったが1880年ごろ特にヨークシャーにおいていくつかのクラブの間で慣例になった。これがもう1つの論争の開始となったが、それによってフットボール界は端から端まで分裂してアソシエーションフットボールが1885年1月25日の特別総会においてプロフェッショナリズムを公式に認めたこと、そして1895年北部ユニオンがラグビーユニオンから脱会したことで最高頂に達した<sup>9)</sup>。

フットボールアソシエーションとラグビーユニオンは最初はプレーヤーにどんな報酬も支払うことに強く反対していた。というのは彼等はまだ中産階級のスポーツマンの見解であったが、彼等はゲームは余暇に行うものと看做し、さらにプレーするために必要であれば仕事から休暇を取る余裕があったからである。プレーヤーへの経費の支払いは不法とする規則が施行された。しかし、経済的事実はアソシエーションとユニオンの2つの統括団体の理想的方針にとってあまりにも強力すぎることを例証し、そして北部イングランドにおいてプレーヤーへの報酬の支払いは、それが公然となされなかったのはもちろんであるが、続行されたばかりでなく金額も増大していった。

それがどれ位の範囲でなされたかは不明であるが大規模でなされていたのは確かである。そればかりでなく、それは単なる経費の支払いで済まなかった。あるクラブは一種の着手金としてプレーヤーに毎週少しの臨時手当を支払ったとか、試合に勝ったり、ゴールを決めたらボーナスを与えたとか、ライバルチームの熟達したプレーヤーを買収したとかの噂があった。1879年のF.A.カップでオーバルにおいてオールドイートニアンズを揺るがした名高いダーウエインのイレブンにジェイズ ラブとファergus スターの2名のスコットランドのプレーヤーが居たが彼等がランカシャーで出場するのは若干の説明が要された。そして1883年のF.A.カップで優勝したブラックバーンオリムピックのチームにそれについて質問がなされたら明らかな擁護の方法のないプレーヤーが2名いた。事実、これらのプレーヤー、そして彼等のように他のプレーヤーもフットボールを行うことによって報酬を得ており、そしてすでに全部ではないにしても一部にはプロのフットボール選手がいた。

彼等の見解が南部イングランドそしてフットボールアソシエーションとラグビーユニオン自体に支配的であったパブリックスクールの卒業

生にはこのすべてに不評であった。しかし、ランカシャーやヨークシャーの人々は独自の道を進み、そして多大の論争の後、アソシエーションは結局はプロフェッショナルリズムの事実を認めなければならなかった。1885年にプロフェッショナルリズムが合法化されそれについて定める規則が作成された。つまり、交通費もしくは宿泊費以外の他の金銭を受領した如何なるプレーヤーも今後はプロフェッショナルと看做すと規定された。しかし、その考え全体は南部イングランドにおいては脅威をもって見られ、そしてプロフェッショナルリズムを最初に導入した最初の南部イングランドのクラブであるアーセナルが1891年に公式にプロフェッショナルリズムを導入した時、他の南部イングランドのクラブの多くはアーセナルとの試合日程を取消した。しかしながら、彼等は当然の成行きですべてプロフェッショナルリズムを導入する運命にあった。プロフェッショナルリズムの意味すること、そしてそれが最初どのように発達していったかについてはルートンタウンの例において見られる。1890年このクラブは3名の地方のプレーヤーに週5シリングの着手金を支払った。翌シーズンチーム全体は週2シリング6ペンス、アウエイマッチでは6ペンスの臨時手当が支払われ、そして土曜日の正午以前の労働時間の報酬は失われた。1892年、普通のプレーヤーの賃金は2倍になり、高額の報酬でキャプテンが指名された。一方、ラグビーユニオンでは中産階級の心構えが支配的であり、そして1893年プロフェッショナルリズムについて論議するために招集された会議においてプロフェッショナルリズムを合法化する提案が否決された。アソシエーションよりラグビーのゲームは労働階級のプレーヤーがはるかに少なかった。ラグビーのゲームを好んだ労働階級のクラブは途方にくれた。というのは、プレーヤーへの補償の手当が禁止され、その禁止が実施されたらクラブの維持が不可能になったからである。彼等のほとんどはすでにアソシエーションの仲間と同様にプレーヤーを引

き留めておくためにあらゆる類のごまかしに深く関与していた。1898年11月のコンテンポラリーレビュー紙に掲載されたユーサー(E. Eusor)によるThe Football Madnessという表題の論説は生起していた物事のいくつかを暴露している。この著者によると北部イングランドのクラブのマネジャーは全く信じられないけちなごまかし、卑劣な欺き、スパイ行為のシステムを確立していた。化粧室において徳目あるように装った役員によって金銭がプレーヤーの靴の中に落とされるとかプレーヤーの手の中にすべり込ませる巧妙な方法の話があった。これには若干の誇張があるにせよ買収や腐敗が流行していたのは明らかであり、そして責任ある役員の見解では、それを矯正する唯一の方法は手当を標準化する方法の適法化であった。それに従って1895年夏、一連の会議が開催された。最終的に8月29日、バットレー、ブラッドフォード、プロートン、レンジャーズ、ハリファックス、ハンスレット、ハル、ハダーズフィールド、リーズ、オールダム、ロックデール、ホーネッツ、セントヘレンズ、ウェイクフィールド、トリニティ、ウォーリングトン、ウィーガン、ウィッドネス、ブリッグハウスレンジャーズ、リバーセッジ、マニングラム、ストックポート、ランコーン、ティルデスレッジの24のクラブがラグビーユニオンから脱会し、彼等独自の組織を形成するという徹底的な手段をとった。それが後にそう称せられたように北部ユニオンのメンバーはフットボールアソシエーションの大多数とは異なって、最初はプロフェッショナルリズムを完全に是認するのに気乗りせず、徐々に是認するに至った。1895年、経費の支払いだけが合法化された。3年後、1898年プレーヤーが他の職業にとどまりフットボールを経歴にしない条件でプレーヤーが試合に出場することによって手当を得るのが認められた。1905年この条件が撤廃されプレーヤーが北部ユニオンのフットボールを行うことによって生計を立てるのが可能になった。多くの若い人々がラグビーユニオンと北部ユニオンの



両方のゲームの機会を得、新しいタイプのプロフェッショナルのフットボールの選手が存在するようになった。

すべてが進んでいる一方で、事実プロフェッショナルリズムの公式の論議が終ったあともプロフェッショナルリズムについての論争は継続されていた。多くの人々はプレーヤーはゲームを行うことによって報酬を得るべきであるとの考えに嫌悪で見ている。1890年代のプロフェッショナルリズムについての不平の多くには根拠があった。たいていのアマチュアのスポーツマンはプレーヤーがすでに認められた報酬のためクラブからクラブと移籍する方法に特に嫌悪した。というのはそれはあまりにも奴隷市場での売買を思い出させたからであった。キャプテン フィリップ トレバー (Captain Philip Trevor) は *The Badminton Magazine of Sports and Pastimes* の1899年、vol. VII1、4月号においてプロフェッショナルについて記述している。

彼の移籍書類は財産の権利証書のあらゆる細心の注意と正確さで準備されており、彼の賃貸のサービスは市場の変動する条件と交換された物品の価値に応じて得られてきた。古い闘技士のシステムは高名なフットボールプレーヤーの現在購入され、売られそして操作される認められた手順の完璧さを欠いたが、しかしスポーツマンシップの均衡は多分にローマ人とともにある<sup>5)</sup>。その論評は辛らつではあったが、それは1891年のアステックニューズ紙に掲載された次の広告から判断して充分正当化されるに違いない。

No. 163——右もしくは左フルバック。  
これは私がかつて名を記入してきた最も有望な若者の1人である。彼は有名な新聞記者に問合わせをしている。その記者は若者がプレーするのを何度も見ており、彼が何をやれるか知っており、彼の能力と将来性について高く評価している。正確な特徴——身長5フィート11インチ、体重、12ストーン；年齢、20歳。あなたに若い巨人の用

意があります。——これは調教に値する小馬であります<sup>6)</sup>。

それは奴隷商人のカタログからの抜粋のように読むことができる。南部イングランドのクラブの幹事たちが人材確保のため時々北部イングランドになして来たと言われる旅行には何か奴隷売買の雰囲気がある。*The New Football Mania*の論説にこれら使用者の1人がどのようにして有望な若いプレーヤーと接触するかについての記述がある。他国人が純真な若者に金銭の餌を与え最高のホテルで高価な食事と飲物で若者を楽しませる。そのあとその若者を南部イングランドに奪い去るのは比較的容易である。しかし血縁者が障害になることが時々あり、他国人は激怒して群衆によって、隣人から泥や石を投げつけられたり、厳しく罰せられたり、そして責めたてられる。

最初プロフェッショナルリズムが公式に認められた時、多くの、多分にはほとんどのアマチュアの人々はゲームの精神が確実に失われたと感じたに違いない。イングランドのラグビーの国際選手のアーサー バッド (Arthur Budd) は1899年すべてのプロフェッショナルのスポーツは墮落、不評そして時にはまったくの腐敗の犠牲になるのが必然と断言しそしてこれがクリケットに生じなかったとしても、それはただ単にクリケットに時間全体を没頭しているアマチュアがただけであったからである。彼が述べている腐敗しやすさの正確な意味することは明らかでない。しかし、プレーに金銭が関与するようになるとすぐにスポーツマンシップやフェアプレーが消失すると感じられたのは疑いがない。

スポーツマンシップについての問題はより詳細に考えて見る必要がある、1860年代のパブリックスクールのフットボールの選手の大多数はあらゆる意味でスポーツマンであったのは多分に事実である。競技規則がまだ流動の状態にあったという事実によりフィールド オブ プレーにおいてでさえ競技規則について疑義や意見の相違は一般的であつたがジェントルマンのプレ

ーヤーは概してジェントルマンのように振舞った。彼等はアンフェアな利益は求めなかったし、相手を尊敬と敬意で扱い意見の一致が見られた時、彼等はそれを遵守した。これは決して普遍的ではなかったがこの時代のゲームの調子はそのような規準に従って行動したプレーヤーによって決定した。しかも、この多くは次の30年で失われた。その低落をプロフェッショナルリズムに帰することが可能であるか？当時の人々の多くはイエスと言ったであろう。しかし問題全体を考えると彼等は誤っていることが示唆される。スポーツ精神は中世の騎士道の規範が自然の法則に反するのと同じように極めて不自然に発達していった。

日曜日の午後、郊外のスポーツグラウンドで行われる少年又は若者のにわか仕立てのチームの間でのフットボールもしくはクリケットのゲームを見てごらんなさい。その雰囲気はファウルだ、あいつをつまずかせろ、あいつからボールをたたき落とせ、あいつのあごをなぐれ、ゴールだ——全くゴールでない時、オフ サイドだ——相手が得点する時はいつでも<sup>7)</sup>。

パブリックスクールにおいて数世代の間スポーツ精神が第1の徳目と看做され育成されたがそのパブリックスクールにおいてでさえアレックウォーがThe Loom of Youthにおいて暴露したようにスポーツ精神は時々はストレス又は興奮の瞬間に崩壊してしまうものであった<sup>8)</sup>。これを念頭におけば1870年ごろ無数の若者がパブリックスクールの理想について何も知らずフットボールを始めた時、パブリックスクールの先駆者によって決められた高い規準からの若干の低下が見られたのは容易に理解される。それは事実フットボールの社会的環境全体の変化であり、そして中産階級よりはむしろ労働階級の倫理が勝っていた。ゲームの雰囲気はそれが多分にあまり正しくないにしてもより人間的により自然になった。ゲームが中産階級でないプレーヤーに普及するようになった時、パブリックスクー

ルで理解されているようなスポーツ精神は異彩を放って現われることがなかった。このどれもがプロフェッショナルリズムによるものでなかったのは明らかである。

プロフェッショナルリズムの初期に共通するもう1つの批判はプロフェッショナルはアマチュアより熟達しているのは確かなのでゲームを破滅させてしまうという趣旨であった。これはアマチュアにとって破滅してしまうとだけしか意味されない。古いパブリックスクールのアマチュアが彼等がプロフェッショナルにはるかにしのがれていることを理解するのは極めて耐えがたかったのは疑いがなく、そしてその批判は実際にある階級のジェラシーと結びついたものであった。というのはプロフェッショナルはジェントルマンではなかったからである。こういった態度や心構えが存在したことは1899年バーミンガムの一流ホテルの支配人がホテルのジェントルマンの客がこれら門外漢の存在を軽蔑するのを恐れ、イングランドのインターナショナルのチームの宿泊を断ったという事実によって示され、そして支配人が彼等の宿泊を認める前にフットボールアソシエーションによって彼等が尊敬に値することの言明が必要とされた。

しかし、プロフェッショナルはゲームを破滅させるところかゲームを向上させ、そしてその際によりよい見せ物を与えた。これは重要であった。ゲームはアマチュアの技術水準で行われるものでなく娯楽の形態になりゲームがスキルフルになればなる程、観客は楽しんだ。中産階級の批評家がたとえ何と言おうともプロフェッショナルのフットボールが何万人もの人々に見られることによってプロフェッショナルが是認された。

このプロフェッショナルの大人気によってプロフェッショナルのプレーヤーが偶像化され英雄崇拜されるやり方についてさらに批判が持ち上った。現在ではこの種のことは当然と看做されているが1890年代にはそれは新奇なことであり、多くの批判を生起させた。批評家はプロフ

ェッショナルのプレーヤーは人気のある崇拜の対象となり、大通りで充分首相の注目を引く熱烈な歓迎を受けていると不平を述べる。プロフェッショナルのプレーヤーは特別列車で遠征し、サポーターの群衆に見送られそして出迎えられる。彼等の個人そしてチームの写真が店頭にのぼり、新聞は略伝をつけて彼等の木版画を出す。彼等には豊富な贈り物がなされる。このような例としてエドワーズはウエストブロムウィッチアルビオンが国会議員によってもてなしを受けたが、その宴会においてすべてのプレーヤーに5ポンドの紙幣が手渡され、そして彼等のために別に各々10ポンド集めるために参事会員の贈り物が請け負われたという事実を引用している。たいまつでの明りの行列があり、他の公的な祝宴があった。試合が行われる時、国会議員や市長がキック・オフをしてわきかえるような騒ぎへの同調を示した。プレーヤーは気持のいい興奮性飲料が与えられ強壮剤と安息香チンキの豊富な使用があり、あるチームは1シーズンで1マイルのほう帯を使用した<sup>9)</sup>。

プロフェッショナルリズムの影響の1つはチームが地方の特性を失ったことであった。名目上、シェフィールドを代表する11名は他の地域のプレーヤーによって構成されたかもしれない。これは初期の批評家の何名かには嘆き悲しむべきことのようにであった。それは確かに急進的な変化であり、古い時代のフットボールにおいて広がっていた郷土愛の精神からの完全な離反であった。しかし、ここにおいても論より証拠があった。何千人ものフットボールのファンはプレーヤーが素晴らしいフットボールを行う限りプレーヤーの出身には構わなかった。事実、強力なチームを作ってライバルに勝利する是認された方法は地方の素質あるプレーヤーに頼らず他の場所から熟達したプレーヤーを獲得することであった。このことがたとえ学校、大学、村、町もくは州の特別の忠誠心の表現としてチームについて考えることに慣れている者にとって異常に思えたとしてもそれはプロのフットボール

には避けられないことであり、それを阻止する試みは失敗した。

アソシエーションフットボールの産業化から生ずるもう1つの重要な発展はリーグのシステムであった<sup>10)</sup>。諸々のクラブは週の給料や他の経費の支払いのため、週に一度必ず試合を行わなければならなかったが、1880年代の状況では諸々のクラブはこれを確実にすることはできなかった。親善試合はいずれかチームの1方がカップ・タイでのプレーを依頼されたら最後の瞬間にキャンセルされるかもしれない。そしてカップ・タイ自体はまったく入場料が入らないことがあるかもしれない。というのはカップ・タイに参加するチームの対戦がまったく出鱈目であったり、ある場合にはチーム間の力の差が試合の結果が初めからわかりきっている程大きかったため、あまり関心が持たれなかったからである。カップ・タイにおいて早い対戦で敗戦したクラブでは何も日程のない日をあとに残した。これに対する解決策は1888年ウィリアム マグレガー (William McGregor) によって見出されたが、彼はスコットランド人でアストンビラクラブと関係があり、影響力のあるスポーツ紙であるアスレチック ニュース紙から強力な支援を得て、プレストンノースエンド、アストンビラ、ウルバーハンプトン、ワンダラーズ、ブラックバーンローバース、ボルトン、ワンダラーズ、ウエストブロムウィッチアルビオン、アクリントン、エバートン、バーンリー、ダービーカウンティ、ノッツカウンティ、ストークの一流の12のクラブを決められたプログラムに応じて、必ずクラブでの最強のチームを出場させて定期的に互いに競技するという協定を導いた。これがフットボールリーグ (The Football League) の始まりであった。

この新しい計画はクラブを安定させる効果があった。諸々のクラブは安定した収入を確実にし、諸々のチームがF.A.カップにおいて早い段階で敗戦し、まったくの試合日程なしに残される代りに毎週いい試合を行えたのでゲーム自

体は向上した。これは1880年代と1890年代に重要なクラブの試合において観客数が非常に増大した原因であった。カップ・タイは記録的收入を得たけれど普通のリーグの試合は毎週10,000人もしくは20,000人を得ており、リーグのクラブの財政的收入はそれに応じて増大したからである。リーグの考えが人気を得たのは驚くべきことではなかった。プロのチームを雇用したクラブと同程度のアマチュアのマイナーのクラブはリーグのシステムが有利であることがわかった。彼等は毎週試合日程が保証されていることから利益を得た。チームはまとまり、競技水準が向上し、サポーターは支援すべき何かを見つけ、そして成功と隆盛の一般的雰囲気が組織全体に広まった。

リーグのシステムには最初から敵意ある批評家が数多くいたが、彼等はリーグのシステムによって悪い精神、つまり強力な盲目的な忠誠心や真のスポーツマンシップとは異なるすべてを犠牲にして勝つという願望が発生すると述べた。1890年代のリーグの敵はリーグはそのメンバーが利己主義の動機や相互に益するという希望によってしかまとまることができない私利私欲に基づいた組合せと定めた<sup>11)</sup>。これらのことはある程度までは真実であった。リーグのトップに達するために激しい競争があり、ほとんど賭けのないアマチュアの精神は確かにリーグフットボールにまったくその居場所がなかった。特定のリーグのメンバーであるクラブは実際問題、そのメンバーシップであることから利益を得たいと考えた。しかし、リーグが隆盛する方法はその長所か短所を大きく上回ることを示しているようである。通常の言葉の意味でのスポーツよりはむしろビジネスと看做されるプロのフットボールにおいてリーグのシステムは明瞭に自分の身の証しをたてた。それは疑いなく利益づくりに基づいたフットボールによって人気ある娯楽を与えるための最上の組織であった。人がスポーツの商業化に反対するののもっともであり、そしてゲームと金儲けが混同されなかった

らそれは多分にいいことであっただろう。しかし商業化されたスポーツの存在を認めれば、それを遂行する有効な方法があるべきであるし、これがリーグが与えることであった。

このようにアソシエーションが大きく転換している最中にラグビーユニオンのゲームはアマチュアを維持した。中産階級とくに中産階級のパブリックスクール派は工業の人々の心をつかんだフットボール熱から比較的逸れたままでいた。彼等はゲームを職業というよりはむしろゲームと看做することを決して止めず、そして一般的に言うゲームを行うこと自体に目的があるとし、ゲームを観戦するのはただ単にそれに付随するものとした。ラグビーのゲームはこのタイプの人間のために娯楽を供給した。中産階級のアマチュアのアソシエーションフットボールのプレーヤーが数多くいたのはもちろんのことであり、数少ない一流のパブリックスクールはアソシエーションを創始したパブリックスクールを含めてよりおだやかなゲームを好んだ。しかし大多数のパブリックスクールはラグビーフットボールを採り入れた。彼等はアソシエーションフットボールの世界で生じた発達をある程度のスノビズム的侮蔑で混じった無関心で見えており、そして彼等自身の世界をそのままにしておくのに集中した。

初めには極めて多くの労働階級のラグビーフットボールのプレーヤーがいた。しかし、ランカシャーやヨークシャーの相当数のクラブがプロフェッショナリズムへの衝動に抗することができず1895年、北部ラグビーフットボールユニオンの設立を選んだ。これによりラグビーのゲームはより独占的に中産階級の領分になってしまった。しかし、サウスウェールズ、カンバーランド、そしてウエストカントリーにおいてはまだ労働階級の人々をつかんでおり時にはパブリックスクールの厳しいゲームの流儀で育ってきた人々に、多分に衝撃を与えたであろうが、激しくそしてスポーツマンシップの細い点を見捨てて行われた。しかしこれはケルトの地域の

精神に完全に一致した。彼等は何世紀もの間、彼等独自の激しいゲームを行ってきており関心をラグビーフットボールに移すのは彼等にとって容易であり自然であった。

最後に、何故、ラグビーよりアソシエーションのゲームが人気あるスポーツになったかについては興味深い問題である。ラグビーフットボールはそれが直接受け継がれたのが疑いのないイングランドの古いゲームに極めてよく似ていた。一方、アソシエーションのフットボールはラグビーのコードを乱暴で俗悪と看做した2、3のパブリックスクールによって採り入れられた紳士的に洗練されたものであった。“めめしい”の語が当時流行していたならばそれは数多くのラグビーのコードの支持者によってアソシエーションフットボールにあてはめられただろう。しかもラグビーよりアソシエーションのゲームが労働階級の若者に人気を得たがゲームを考案したチャターハウスやウエストミンスター校の学生や卒業生の目ではラグビーは乱暴で俗悪であった。多分に遺伝が何かそれに関係があったかもしれないし、イングランドのほとんどの地域における伝統的なゲームはノンハンドリング形式のフットボールであったかもしれない。しかし、サッカーの中心地であるイーストアングリシアはあてはまらないがイーストアングリシア土着のキャンプボールは非常にラグビーのゲームに似ていた。多分にイングランドの町で生まれた人には激しいラグビーを行う体格もしくはスタミナが無かったかもしれないがラグビーはカンバーランドもしくはサウスウェールズの坑夫を引きつけたかもしれない。しかし、多分に第一の理由はアソシエーションのフットボールはどんな場所においてもどんな条件の下でも余暇の30分を充分過ごせることが可能なことであった。ラグビーフットボールを行うには芝生が必要であるし、プレーヤーは衣服を破損したくないと思えば更衣が必要であった。彼等がスピードを維持しようとするれば身体的にフィットしていなければならぬいいトレーニング状況にな

ければならなかった。さらにラグビーフットボールには勇気、忍耐力そして自己犠牲の能力を担当要求するゲームであった。そればかりでなく練習やコーチングなしには充分には行うことができなかった。しかし、サッカーはどんな種類のグラウンドでも、硬い又は柔軟な、どんな大きさ又はどんな形状の屋内又は屋外でも、どんな種類のボールでも行うことが可能であった。プレーヤーの数はほとんど問題にならず、そして、はなはだしい損傷や危険がなく普段の衣服、普段の靴又はシューズを着用することができた。そればかりでなくサッカーのプレーヤーは特別にいい体格である必要はないし特にいいトレーニング状況にある必要はなかった。一流のアソシエーションフットボールのことを言うのではない。どんな少年又は若者もボールを蹴り回すことが可能で、そしてそれ以上のことがないにしてもまだゲームである。一方、ラグビーはそれを少しでもゲームであらうとするためには技術トレーニング、勇気そしていい体格が要求されるのである。要点は下手になされるサッカーでもゲームであり、下手になされるラグビーにはほとんど魅力がなかった。これらの要因が19世紀のカジュアルなサッカーの異常な普及を説明するがイングランドすべての少年が余暇の時間があれば何かを蹴りまわすのをほとんど第2の天性にした。

#### 註及び引用・参考文献

- 1) Montague Shearman, Football, Longmans Green, and co., 1899, pp. 162-181.
- 2) Bye-Gones relating to Wales and Border Countries, V 111, 1899, pp. 751-760, quoted in Marples, A History of Football, Secker & Warburg, 1954, p. 173.
- 3) G. Green, The Official History of the F.A. Cup, 1949, p. 59, quoted in Marples, ibid., p. 176.
- 4) Montague Shearman, ibid., p. 8.172-184.
- 5) Captain Philip Trevor, The Season's Football, the Badmington Magazine of Sports and Pastimes, April, 1899, p. 424.

- 
- 6) C. Edwards, *The New Football Mania*, Nineteenth Century, Oct., 1892, pp. 622-631, quoted in Marples, *ibid.*, p. 181.
- 7) C.E.M. Joad, *The Englishman and Sport*, Home and Away, 11th, Contact Book, 1948, p. 2, quoted in Marples, *ibid.*, p. 181.
- 8) Alec Waugh, *The Loom of Youth*, ed., 1924, p. 178.
- 9) C. Edwards, *The New Football Mania*, Nineth Century, Oct., 1892, pp. 622-631, quoted in Marples, *ibid.*, p. 185.
- 10) Montague Shearman, *ibid.*, pp. 168-173.
- 11) Montague Shearman, *ibid.*, p. 171.